

3. 現職教育

1. 研究主題

学ぶ力を育てる

◇主題設定の理由

(1) 児童をとりまく社会状況

現在、私達を取り巻く社会は、科学技術の発展や経済構造の変化、IT関係のめまぐるしい発展に伴い、物質的にとても豊かになった反面、これらの変化に伴い児童の取り巻く教育環境や教育に対する意識に大きな影響を及ぼしていると考えられる。また、人間関係も希薄になってきているようにも思われる。

新聞やテレビ等では、親子のもつれや突発的な行動により、命を粗末にしてしまうという事件が後をたたない状況でもある。

児童が変わったのではなく、社会が変化し、その環境のなかで変わってしまったとも言えるであろう。これはどうすることもできない現実である。

社会が変化していくであろう現状の中で、大事にしなければならない“命の尊さ”“豊かな心”を見失うことなく生きていける児童にと願わずにいられない。しかし、現状の社会に適応できることも大事であろう。

子ども達の未来が輝かしいものであってほしいの言うまでもない。その未来に向かい“自ら考え、学ぼうとする意欲と力”をもてる児童の育成を大切にしていきたいと考える。

(2) 児童の実態と教師の願い

本校の児童の実態を見ると、純粹で誰に対しても人なつっこく、自分本来を出せる等、明るく子どもらしい。また休憩時間には異学年で一緒にドッジボールやサッカーをしている姿をみていると、学年問わず仲が良い。

しかし、学習姿勢・生活面・仲間作りに関わって、まだ十分育っていない児童も見られる。

例えば、“今自分は何をしたらいいのだろう”と自ら考えて行動できる児童が少ない。また、生活リズムの乱れから、朝のスタートから集中力や持久力に欠ける児童もいる。話し合い活動では、自己主張はするが、人の話が聞けない。語彙力が弱いために、自己表現が苦手である等である。

このような本校児童の実態から、自ら学ぼうとする意欲を高め、学び方を知り、自ら挑戦していける意欲・態度を養っていきたいと考え、研究主題「学ぶ力を育てる」を設定したのである。

2. 本年度の研究課題

一人ひとりが活躍できる授業をめざして

(1) 一人ひとりが活躍できるとは・・・

子ども達一人ひとりが自分の考えをもち、その考えや感じたことが出し合える、また失敗をしたり立ち止まったりする事があっても、その失敗を互いに認め合い評価し合える集団がある。何よりも楽しくて心安らぐ場(学校・学級)であって、初めてありのままの自分の特性をその中にさらけ出すことができる。子ども達は、そのような集団のなかでこそ、“自ら学ぼう”という意欲がもてるようになり、一人ひとりが活躍できるであろう。

学級経営を基盤に、子ども達が自ら学ぼうとする意欲をもつための授業を私達は考えていかなければならない。

(2) 授業の工夫

①基本的学習様式の定着

- ・聞き合う姿勢、話し方、挙手の仕方、返事 等

②子どもを知る

- ・子どもの日常観察・日記・作文等で、子ども達を多面的にとらえる。
- ・個に応じた支援の在り方について考える。

③授業での発問

- ・考える視点が明確になっているかどうか。
(発達段階に応じた発問、興味のわく発問、互いに話し合える発問 等)

④意欲を呼び起こす指導方法の工夫

- ・子どもの興味・関心を引き、学習意欲を呼び起こすような、挿絵・プロジェクター・ペープサート等を効果的に使う。

⑤板書の工夫

- ・学習後、一時間の学習の流れが分かる板書

⑥支援と評価

- ・子ども達一人ひとりを認め伸ばすためのものである。子ども一人ひとりに合ったアプローチの仕方、個々がどう変容してきているかをみとる。

(3) 特別活動・道徳・総合等の関連 ～教科だけでは育たない学ぶ力～

特別活動は、子ども達の自主的な集団活動の場である。特に話し合い活動では、互いに自分の思いや考えを出し合い・聞き合うという活動を取り入れる事が、すべての授業の話し合いの基盤となるであろう。

また、特別活動は“成すことによって学ぶ”といわれるるように、自分で何をしたいか考えて決定(自己決定)しながら次に活動に進んでいく力がつくのである。

道徳においては自分と資料の内容を重ね合わせながら、自分自身の課題としてとらえ追及していく過程で、友達の考えのなかに自分とは違う価値があることに気づき、そして互いに自分の思いを出す事でより高い価値を見い出していく事ができるのである。自分の思いを表現できない子どもは、“書く”ことで自分の思いを伝えることもできる。

総合の時間においては、学び方を学ぶ時間でもある。自分で決めた課題を追求していく楽しさを知るであろう。また、まとめていく力もつく。

教科で学習した事が、総合の時間のまとめる活動で生かされるように、すべての学習が相互に影響し合い“学ぶ力”がついてくるであろうと考える。

(4) 最後に

一人ひとりが活躍できるように、私達は、子どもの実態（学習面において）を知らなければならない。そして一人ひとりの子ども達に、何を学ばせたいのかを明確にし、個々にあったアプローチの仕方を考えていく必要がある。

また、基礎学力（書く・読む・計算）の定着をはかるなかで、今年もそのなかで“書く”を中心に組み組んでいきたい。子ども達にただ書かすのではなく“書きたい”気持ちにさせる手立てを考えていくことが大切である。

そして最後にそれぞれ個人が、ブロック・全体場で、その子にあったアプローチの仕方がどうであったか考え・話し合い研究を深めていきたい。

□□本年度の取り組み□□

① 研究組織

☆低学年ブロック（1・2・3学年担任、専科、学推、養護、教頭）

☆高学年ブロック（4・5・6学年担任、ひまわり、学推、校長）

・各ブロック会 …子どもの実態や各取り組みを交流する。

各学期には、全体の中で各ブロックの交流する機会をもつ。

各学年の授業研究に向けての話し合いをする。

☆現職教育・・・第1・2水曜日 14時45分～ 高学年図書室等

第3・4水曜日 13時50分～（夏場はパソコン室）

☆現教委員会・・・研究計画の立案・内容等を具体化し、全体会に提示する。

基本的に、毎月第一月曜日の15時45分からと位置づけ、

必要に応じて召集する。

② 実践の公開

☆各学年1授業公開

・部別学年別、ブロック人権教育研修会、授業研究（学校教育課訪問含む）

☆授業研究について

・各ブロック中心で取り組む。

・授業者の考えを中心に授業展開を考えていく。

・授業者は、事前に全体会で授業者が授業のなかで一人ひとりが活躍できる手立てや注目児童等を伝える。

・研究教科は、特に決めていない。

③ 講師を招いて学習会をする。